

# 学校だより



【子ども達から、金子みすずさんから……支援を受けて】

校長 小出 信晴

大雨洪水が局地的被害をもたらした異常気象の夏がいつしか終わり、2学期は学校祭、修学旅行、交流会などの行事が次々と実施され、一年で最も長い学習期間も今はまとめの時期に入っています。

そんな中で高等部を3月に卒業する3人が、体育館の舞台の上で一人一人マイクを通して発表した学校祭での姿は、（彼らを知るものにとっては）全校での行事交流の大切さを再度我々大人に示すものでした。

日々何となく見過ごしてしまいがちな子ども達の育ちを、行事を通して全ての職員で見ること、我々教師自身が勇気づけられ、教師としての公共的使命を子ども達の成長を通して再確認もし、実感できる機会でした。

2学期を終えるにあたり、保護者の皆様には本校教育への御理解・御協力をいただき、心よりお礼申し上げます。

さて、「特別支援教育」が制度化されて2年目ですが、この理念は、

- (1) 子ども達の自立と社会参加に向けた自らの活動（主体的活動）を支援するために、一人一人の指導・支援計画を作成し、学習や生活上の困難を改善克服する指導支援を適切に行う。
- (2) 特別な教育的支援を必要とする知的ハンディの無い子ども達も新たに対象とするもので、全ての学校で実施すべきもの。
- (3) 更には、ハンディのある子ども達への支援に止まらず、障害のあるなしや個々の違いをこえて、様々な人が生き生きと活躍する「共生社会」形成の基礎になるものでもあり、将来社会の形成にとって重要な意味を持つものである。

……とする考え方です。

この「特別支援教育の理念」を多くの人々に広げていくことも、ハンディのある子ども達を社会へ送り出す私たちに課せられた使命といえます。

人間誰しもが、「競争」「差別」「格差」等で表される社会よりも、「自立」「社会参加」「共生」等が表立つ社会を望むでしょう。しかし、日々の具体的事象において、私事に及ぶとなかなかそうとばかり考えきれない面が生じてしまい勝ちです。

そんな時、金子みすずさんの「私と小鳥と鈴と」が思い起こされます。

「……みんなちがって、みんないい。」は、共生社会の一面を表しているように思えてなりません。

## 私と小鳥と鈴と

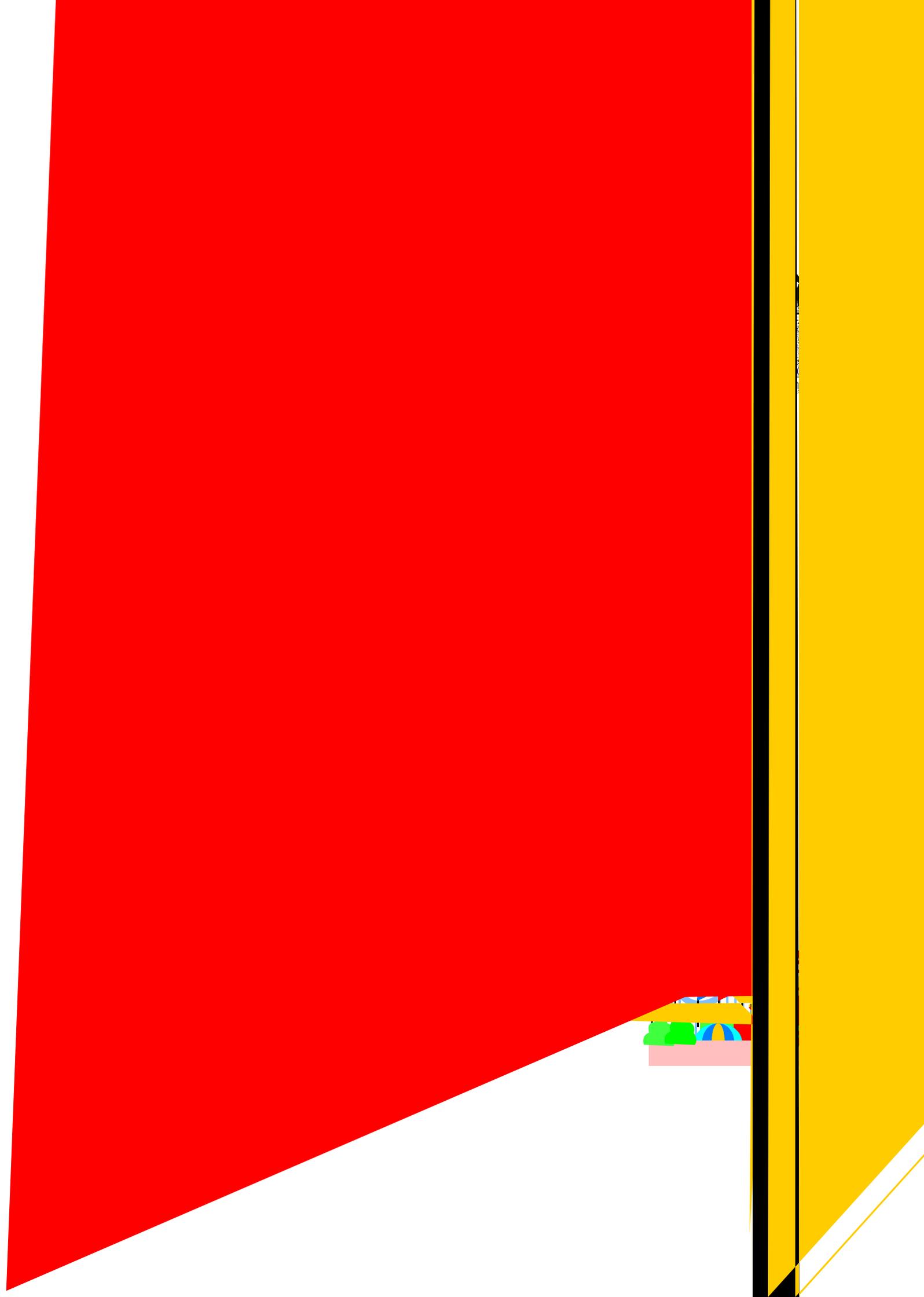
私が両手をひろげても、お空はちっとも飛べないが、  
飛べる小鳥はわたしのやうに、地面（じべた）を速く走れない。

私がからだをゆすっても、きれいな音は出ないけど、  
あの鳴る鈴は私のように、たくさん唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。



子ども達と金子みすずさんに支援された私の2学期も、今、まとめの時期に入っています



## 【高等部「実りの2学期 生き生きと・・・」】

高等部総括主事 堀川 禎暢

多くの行事に取り組んだ2学期。生徒達は生き生きと元気いっぱいの表情で各行事に取り組んでくれました。9月3日、4日に実施された「ふれあい・心のステーション」では、職業で制作した陶器製品、木工製品、布製品、紙漉製品、組み紐製品等の販売学習を行いました。

販売は、9組から13組までの2、3年生が中心となり取り組みました。

事前に大丸での研修も受けて、販売に関してのマナーや、お客様とのやりとりの中で、コミュニケーションをする力を養いました。また、実際に製品が売れていくことを目の当たりにすることで、社会参加への実感や、自信を持ったことでしょう。

また9組から11組の生徒中心に組み紐の実演も行い、場内から喝采をあげていました。

その勢いは学校祭へと続きます。

平素の学習の充実とその発表をグランドやステージを中心に発表しました。

ステージ発表では、緊張にも負けず精一杯の笑顔や声で、自分自身を表現する生徒が多く、見ている人たちから多くの拍手をもらっていました。

グランド発表では、走る、跳ぶ、投げる、越える、歩く等、それぞれの課題を元気よくクリアしていたと思います。

今年度より、2学期実施になった修学旅行も元気いっぱい多くの思い出を作りました。北九州方面への2泊3日。多くの友達と過ごし、あらためて友達の良さ、意外なところを発見したことでしょう。

高等部生徒はこのような日常の頑張りも力として、自分自身の進路と向き合った時期でもあります。できることを精一杯行うこと。できることを増やすこと。そして周囲の人々と共に生きること。以上のようなテーマで産業現場等での実習に取り組んだ3年生は、いよいよ実社会に向けて自分を見つめ、鍛える時期にきています。

あきらめずに頑張ってください。

